

國學院大學學術情報リポジトリ

播磨国風土記神話の研究：神と人の文学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 飯泉, 健司, liizumi, Kenji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002455

播磨国風土記には多くの神々が登場する。怒る神、笑う神、泣く神、戦う神、負ける神、逃げる神等、極めてバラエティーに富む。各々が独特の個性を放ちながら力強く、自らの存在を主張している。ある種の強^{したた}かさを持つ。

これらの神々は、記紀や出雲国風土記の神とは異なり、整然とした神統譜の中には組み込まれていない。記紀神話のように書物上で造形された神とは質を異にする。播磨の風土や信仰・生活と密接な関係を有する、共同体に根ざした神である。

播磨の神の背後には人間がいる。人々と対峙する自然の中に神は存在し、逆に信仰する人々の心を神は代弁する。人との関わりにおいて播磨の神話は生成される。

よって神話を「人」という観点から分析することは、播磨国風土記の場合には有意義であると考えられる。本論文でいう「人」とは「神話を生成した風土で生活する土地人」、「その生活を神話化した作成者」、「在地の神話を展開させた周辺者」、「神話を収集・筆録した国造」、「神話を整理・修正・加筆した国司」、「神話や伝承を中央・他所に流通させた者」という六者を想定している。

これらの人々の間で神話が文学化される。神話の文学化は人々の思惑と連動している。本論文では、人がいかに神話を作り、改変し、記載し、流通させたのか、という観点から在地神話を分析する。そのことよって、播磨国風土記神話の文学史的な位置について、時間的空間的に考察することを目的とする。以下、各部の概要を述べる。

第一部では、播磨国風土記の全体的な特徴（文学的側面とその背景、説話のパターン、「素朴さ」等）について論じる。播磨国風土記の説話は、記紀とは異なる神観

・天皇観・話型・歴史観を有し、非説話記事を面白い説話に展開させようとしている（第一章「説話のパターン」）。播磨国風土記神話がもつ面白さ・素朴さは、温暖かつ豊かな風土と、その地に住む素朴な人々の知恵とに起因している（第二章「神と人―神話の面白さ」）。また自由さ（時間的・空間的）と無秩序（国土を争う土地神と人）については、その後、読者への配慮という編纂者の意図が働いている（第三章「神と編纂者―特殊性」）。

第二部では、荒ぶる神の神話が生成する背景と、文学的に脚色される過程について論じる。怒る神という感情的な神が語られる背後には、神と一体感をもったシャーマンによる、神に感情移入するという体験が存する（第一章「怒る神とシャーマン―十四丘」）。氾濫する川の神の話の背景には、祭祀を成功させて居住することができた者がおり、その者によって文学的な脚色（旅人の祭祀と対比、橋姫伝承の如き嫉妬譚を用いて脚色）がなされている（第二章「行路妨害神と移住者・旅人―佐比岡」）。「仏像に似る」という新たな神の表現が生成する背景には、海の民が感じた神嶋の神の姿（豊かな漁場の恵みの神、祭祀されない荒神）がある。編纂者が、その姿に当時の仏像の様子（塵埃を被る）を重ねたのが「仏像に似る」という表現である（第三章「放置された神と海の民―神嶋」）。

第三部では、神霊が鎮まる神話を取り上げ、筆録者・伝承作成者の知恵について論じる。崇る霊剣を現在でもミヤケで管理している話には、良吏であることを主張しようとした国司の知恵が存する（第一章「霊剣を管理するミヤケと国司―仲川里」）。遠方の出雲神を引き寄せるために、大和三山伝承を独自に再解釈してダイナミックな伝承を作成した者がいた。それは当該地の伝承ではなく、隣村の越部里（駅家・ミヤケ）という周辺者

（中間者）が作成している（第二章「遠方の神を引き寄せる近隣者―神阜」）。

第四部では、争う神々の神話を取り上げ、伝承が展開する様子を探る。国占め儀礼を基に物語性を有する国占め伝承が生成する（第一章「国占め神と居住者―粒丘」）。そして国占め伝承（土地神祭祀）は、律令国家の思想、及び律令官人の姿（良吏・能吏）を反映した国譲り神話（国家神話）へと展開し、さらにその国家神話が風土記に影響を与えている（第二章「神殺しと能吏―国譲り神話」）。開拓民の伊和氏は、勢力を播磨全土に伸ばすために、総合祭祀装置（三つ山祭祀）を使用して各地の土地神と習合しながら伝承を展開させてイワの大神神話を作成した（第三章「習合神と開拓民―イワの大神」）。

第五部では、神に関わる天皇の話を取り上げ、神話から脱却して、天皇独自の話が出来る上がる過程を論じる。国造は、土地神の強大な力（土地の力）を誇示するために、天皇が獵に失敗する伝承を作る（第一章「神に負ける天皇と狩猟民―伊刀嶋」）。天皇は神の引き立て役であった。ところが天皇（オケ・ヲケ天皇）は、在地風に再解釈されるとマレビト神的存在となり、母子愛情物語風に脚色される（第二章「神となったオケ・ヲケ天皇―志深石室」）。さらに神話とは異なる政治的な氏族伝承（播磨国造の勢力圏内に但馬国造が割り込む根拠を語る伝承）としての天皇（品太天皇）像が作成される（第三章「巡行する品太天皇と国造―安相里」）。

第六部では、神と人との関係性及び距離について論じる。共同体の女性はすべて神の嫁となることを強いられた。よって神の嫁が人の嫁になるためには遁走婚の儀式を経なければならぬ。その儀式を基にして〈ナビツマ〉伝承が作られる（第一章「神の嫁と人の嫁―南毘都麻」）。一方、神の土地を破壊する者（石工）が、逆に神として認識されるようになる（第二章「天に通う人々（石工）―八十橋」）。神の話（地名起源）を語ることで

出来るのは共同体と接触しつつも、内部の秘密には触れない者（中間者）であった（第三章「神を語れる者、語れない者―都太川」）。

第七部では、伝承が、地方と中央とを循環することによって文学的に脚色されることを論じる。駅家・ミヤケには文化サロンの雰囲気があり、都と鄙との文化的架け橋の役割を果たしていた。地方と中央の中間という立場（中間者）から、中央や他所の伝承を取り入れつつも、各地の風土を反映させた独自の伝承を生成させた（第一章「地方から中央へ―駅家・ミヤケの文学」）。そのような国家施設（駅家・ミヤケ・軍団等）を通じて地方と中央との間に文学が循環しており、資料には表れない文学サイクルが存在したことが想定される。文学サイクルは後世文学にも影響を与えるが、やがて律令制の崩壊、古代官道の衰退によって姿を消す（第二章「地方から後世へ―八世紀の文学サイクル」）。本論文では、「神と人」という観点から、神話（在地文学）の生成と展開及び流通について風土的・文学的に考察する。そこで見えてきたものは、おおよそ二つの現象にまとめることができよう。一つは神々が変貌する様子（あるいは神を変貌させる人の姿）である。原初的な荒ぶる神は和められて（第二部）、土地に鎮座する（第三部）。その土地神はやがて他所の神と争いながら、姿を変えつつ各地に進出する開拓神（第四部）へと変貌する。そのような神に天皇や人が接近する（第五部・第六部）。天皇は神に負けたり、神となったりしつつも、神とは異なる天皇像が作り出される。人は神人となり、神の心を教わり、新たな神を幻想したりして、神と関わる。これらの現象は、神と神（人と人）が競合するという、開拓地たる播磨の風土と関わっている。播磨国風土記神話の大きな特徴である。

もう一つは、人の主張と知恵である。神話の背後には人の主張が隠されている（第二〜四部）。そして人は、その主張が伝わりやすいように工夫を施す（第三〜六部）。他者と対比したり、他所の話を援用したり、視点を変えたりして、聴衆が興味をそそるような技法を用いる。これは語りの技であり、文学的な技法である。人はそれぞれの立場（旅人・移住者・開拓者・農耕民・狩猟民・漁業民・石工・シャーマン・国造・国司・駅家の民・ミヤケの民等）によって思考は異なるものの、各自の主張を正当化するために、文学的技法を用いて神話を加工する。在地文学の生成である。そのような在地文学は、駅家・ミヤケ等の国家施設を通じて都や地方を循環しながら、更なる展開を遂げ、後世文学にも影響を与えることとなる（第七部）。

神と人という関係から見えてくるのは、人は必要に応じて神々を変貌させる、ということである。その際、文学的な技法を用いて、話としてより面白いものに展開させた。かかる展開を可能にしたのは、作成者の立場であった。内部（土地）にいる者の主張を根幹としながらも、内部（土地）から空間的・心理的に離れた中間者になることによつて（再解釈の視点等を用いて）話を面白くすることができる。一方で、土地（内部）に近づきすぎたり、逆に離れすぎたりすると話は生成しない。土地人（内部者）、周辺者（中間者）、外部者といった異なる立場の者が、土地と関わりながら話を変容させる。

以上のように本論文では、播磨国風土記神話を通して、時空という観点から古代文学史の一端について考察する。